

1 学校教育目標

- 学ぶ人(知) ○ 思いやる人(徳) ○ 鍛える人(体)

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	<ol style="list-style-type: none"> 1 保護者・地域から信頼され、「入れて良かった」「3年間学んで良かった」と思われる学校 2 「今日が楽しく、明日の登校が待ち遠しい」学校 3 一人一人が大切にされ、出番が保証され、自己有用感を感じられる学校
○児童・生徒像	<ol style="list-style-type: none"> 1 主体的・意欲的に学習に取り組み、確かな学力・生きる力を身に付けた生徒。 2 基本的な生活習慣を身に付け、規律正しい生活を送れる生徒。 3 自己を生かし、何事にも希望を持ってねばり強くやり抜く生徒。 4 いじめを許さず、互いの良さ等を認め合い励ましあうことができる心豊かな生徒。
○教師像	<p>本校と自らのミッションを明確に意識して、協働して前進できる教師</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 生徒に対する愛情に溢れ、温かく、厳しく生徒を指導・成長させる教師 2 自らの授業を常に改善し、生徒の学力定着と進路保証に全力で取り組む教師 3 常に自らを高めようとする意識を持ち、謙虚に努力を重ねる教師 4 理想の学校作りに向けて協働して取り組むことに喜びを感じる教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

- <現状>・挨拶を返す生徒がほとんどで、授業や集団行動時の規律も特に問題は見られず、落ち着いた学校生活が営まれている。
- ・各教員は、学習指導・生活指導の両面で、個々の生徒に対して粘り強く、きめ細かい指導を行っている。
 - ・保・小との連携も継続的に進められているが、やや、教科指導面の研究主体となり、児童生徒の実態に即していない部分があった。
 - ・中央委員会の活性化や活動の可視化など、生徒会活動が担当教員の指導の成果があらわれ、活性化の一途にある。
 - ・コミュニケーションの教室での指導は、ブロック内の模範的な指導と認められ、大きな成果をあげている。
- <成果>・生徒の学習意欲は向上しているが、特に、数学・英語の底上げが必要である。
- ・AIドリルを授業だけでなく、家庭学習でも活用しており、教員のICT活用能力も高くなってきている。
 - ・保小中連携の推進を通して、熱心な研究が行われ、身につけるべき学力について、各校種間で共通理解が図られるようになりつつある。
 - ・生徒会主導による異学年構成での授業等、生徒が中心となって活動する取組が浸透してきた。
- <課題>・生徒の現状を正しく分析し、それに基づいた個々の生徒に合った対応策の実行と、できた！わかった！という実感を伴った学力向上の達成。
- ・授業時における足立スタンダードを意識した授業を全教員が実施することと、まとめ・振り返りを確実に行わせ、学習事項を定着させる指導が必要。

- ・生徒の自己有用感や達成感が得られるような体験活動の重視。授業では、全教員が「主体的で対話的な深い学び」を意識した授業づくりに取り組み、GIGA スクール構想に則った日常的な ICT 機器の活用を全教員が実践し、AIドリル等を活用して、学力定着に向けた取組を組織的に展開する。
- ・義務教育終了までの幼・保、小、中連携を、原点（授業規律の徹底化）を意識しながらさらに進める必要がある。また、この取組を継承・発展させていくために、後継者の育成が急務の課題。
- ・特別支援教育コーディネーター主導の校内支援委員会によって、さらに特別支援教育を充実・発展させること。また、不登校傾向の生徒を新たに生み出さない指導・支援と教室復帰に向けた取組を、教育相談コーディネーター主導の下、SC・SSW などの人材や他機関との連携と、新規に開設される SSR 担当教員の力をそれぞれ活用して組織的に実践すること。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	生徒の豊かな心を育む	○	○	○	○	○
3	保小中連携の推進と進化発展	○	○	○	○	○

5 令和5年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン			
A 今年度の成果目標	達成基準 (目標通過率)	実施結果 (通過率結果)	コメント・課題		達成度 ◎○△●

<p>区学力調査において、3 学年とも、正答率 60%を超える</p>	<p>令和 5 年度区学力調査通過率 55%以上 (1.2 年は 60%以上) 年度未到達度確認テスト 60%以上</p>	<p>結果は、下記のとおり 【学校全体】 国 63. 6 数 53. 0 英 60. 9 【学年別】</p> <table border="1" data-bbox="999 252 1408 400"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>国</th> <th>数</th> <th>英</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 年</td> <td>54. 5</td> <td>50. 0</td> <td>70. 5</td> </tr> <tr> <td>2 年</td> <td>66. 0</td> <td>32. 0</td> <td>62. 0</td> </tr> <tr> <td>3 年</td> <td>56. 1</td> <td>47. 4</td> <td>52. 6</td> </tr> </tbody> </table> <p>昨年度 (R4) に比すると、学校全体では、国語は+5. 4、数学は+1. 4、英語はマイナス 9. 3 である。</p>	学年	国	数	英	1 年	54. 5	50. 0	70. 5	2 年	66. 0	32. 0	62. 0	3 年	56. 1	47. 4	52. 6	<p>○国語については全体的に取り組みの成果が現れている。特に、国語科教員の奮闘による朝学習での新聞コラムの書き写しや、一斉の朝読書などが影響していると考えられる。 ○数学は微増であるが+の結果となった。少人数指導による丁寧で手厚い指導を今後も継続させていく必要がある。 ○英語は、10 ポイント近いマイナスとなった。英語科では、学習指導要領に沿って、話し合いや教え合い等のペア学習を実践しているが、今後も継続する一方、特に基本となる単語力や読解力にも力をいれ、何よりも英語嫌いを生まない授業展開を心がけて指導していく。</p>	<p>△</p>
学年	国	数	英																	
1 年	54. 5	50. 0	70. 5																	
2 年	66. 0	32. 0	62. 0																	
3 年	56. 1	47. 4	52. 6																	

B 目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
-----	----------	--------------	-------------	-----------------------------	------------	-------------------------------	------	---------	-------------

新規	AI ドリルを活用した家庭学習の導入	全学年 5教科	通年で 毎日実施	これまでの家庭学習ノートを廃止し、代わりに、家庭として AI ドリルに取り組ませる。実施状況を担任等が把握し、家庭学習が出来ていない生徒には、学年として放課後補充教室を開講し、個々に指導する。	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に、担当者および学年教員が実施状況を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての生徒が1日に1時間以上の家庭学習を実施すること。 ・各学年で上記の実施状況を、生徒数の80%とする。 	<p>○家庭学習としてのAIドリルには、ほとんどの生徒が取り組んでいるが、比較的短時間で課題を終えてしまうことも多い。</p> <p>○1生活アンケートによる家庭学習時間</p> <p>☆1時間以上 1年 10.5% 2年 50.0% 3年 78.3%</p> <p>☆1時間未満 1年 89.5% 2年 61.4% 3年 32.6%</p> <p>→以上のことから1時間以上の家庭学習は、学年による差はあるが、全学年では実施できていない。</p>	<p>来年度は、さらにAIドリルを学校として研究し、各教科が課題を工夫して取り組ませ、質的にも量的にも充実した家庭学習になるようにする。</p> <p>保護者会等を通じて、家庭学習の重要性をその都度訴えて、家庭保護者の協力を仰ぐ。</p>	○
継続	各調査等の積極的活用	五教科	その都度	<ul style="list-style-type: none"> ・区調査は自校採点及び分析を行い、未定着項目を確認、授業や補充教室の内容に生かす。 ・年度末に定着度調査実施し、結果を全校で共有し活用する。 ・国・都調査も積極的に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科会での分析 ・教員の学校評価 ・年度末の生徒による評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査結果で肯定的な回答80%以上 	<p>○教員の学校評価では、「よくできた(41.7%)」「おおむねできた(58.3%)」と、全員が肯定的な評価をしている。</p> <p>○生徒評価では、この件については質問していないため、不明。</p>	<p>次年度は、実施後の早い段階で生徒・教員のアンケートを実施し分析する。</p>	△

継続	定期考査前 補充教室	希望生徒 基本は五教科	年4回の 定期考査 前1週間 程度	<ul style="list-style-type: none"> ・全校体制で取り組む ・定期考査前に苦手内容の克服・学んだ内容の復習を実施 ・各教科担任作成のプリント、授業中ノート等を教材とする 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査の 得点分析 ・生徒に実施 後にアンケートを取る 	<ul style="list-style-type: none"> ・受講生徒の得 点を10点上 げる。 ・アンケートで好評 価を得る 	<p>○定期考査後の得点 状況について、正式 な実態調査は実施し なかった。</p> <p>○アンケートも実施 しなかった。</p>	<p>次年度は、早期に、 定期考査終了後の早 い段階で、生徒・教 員のアンケートを実 施する。また、「出て 良かった質問教室」 となるよう、全教員 が創意工夫して質問 教室を実施する。</p> <p>さらに、今年度よ り実施した、生徒に 予想問題を作成させ て生徒主体で取り組 ませる。</p>	○
継続	サマースク ール	全学年 英語・数学 を基本 対象者と学 習内容を右 記の通りに 分ける	夏休み期 間中の6 日間。 各日50分 ×2コマ を原則と する	<ul style="list-style-type: none"> ・指導体制は、教員＋ボラ ンティア ・対象生徒は、前期中間考査 の平均点を下回る、区調査 の正答率50%以下の生徒 または、区調査正答率 30%未満の生徒。 ・少人数指導を基本とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒の アンケート ・参加生徒の、 授業等での 理解度の変 化を見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒のアン ケートでの高評 価。 ・前期期末考査 での得点10 点以上のア ップ。 	<p>○アンケートは実施 しなかったが、参加 生徒の態度や表情か らは、とても前向き で充実していたと判 断できる。</p> <p>○定期考査後の得点 状況について、正式 な実態調査は実施し なかった。</p>	<p>次年度は、早期に、 定期考査終了後の早 い段階で、生徒・教 員のアンケートを実 施する。また、得点 結果から、出席生徒 の得点状況も調査 し、その後に活かす。</p>	○
継続	読書月間 の実施	全校生徒	年2回 一ヶ月の 実施	<ul style="list-style-type: none"> ・図書委員会の活動とリンク させて実施。 ・読解力の向上と、長文を読 むことへの抵抗感を減ら す。様々な図書に触れさせ 読書の幅を広げること を目的とする。 	生徒の学校評 価 教員の実施評 価	調査結果で肯 定的な回答 80%以上	<p>○生徒のアンケート は実施しなかった。</p> <p>○教員の学校評価で は、「よくできた」が 40.3%、「おおかた できた」が59.7%で、 全員が高く評価して いる。</p>	<p>図書担当教員や、 学校司書の努力も大 きく、創意工夫した 取り組みが実践され ている。今後も読書 活動を重視し、取り 組ませ、ビブリオバ トルに繋げていく。</p>	◎

継続	朝学習 (朝読書)	朝読書を中心とする。他に、新聞コラム読み取り書き写し	年間を通じて実施	読書：情操教育と読解力向上の一助を目的とする。全員で一斉に10分間の読書を実施。水曜日には新聞コラムの書き写し。	生徒の学校評価 教員の実施評価	調査結果で肯定的な回答 80%以上	○生徒の85%が充実していると回答。 ○教員の学校評価では、「よくできた」が33.3%、「おおかたできた」が66.7%で、全員が高く評価している。	朝学習時の読書は、定着し、ビブリアバトルに繋がっている。 毎週水曜日の新聞コラム書き写しは、国語科教員の奮闘により継続して取り組まれており、生徒も楽しみにしている。今後も続けたいが、教員の負担は大きいので、やり方を工夫して継続して取り組ませる。	◎
継続	・「検証と対策」を主眼に置いた授業の質的向上	全教員	年間を通じて	<ul style="list-style-type: none"> ・教科専門指導員を活用した、授業力の向上を図る。(通年) ・若手教員に対する指導教員の指導と研究授業公開(通年) ・生徒による授業診断(年間2回) 	生徒の授業評価 教員の学校評価	調査結果で肯定的な回答 80%以上	○生徒・教員とも、アンケートは実施しなかった。	英国数3教科とも、該当教員と教科専門指導員との人間関係は構築されており、的確な指導が行われた。 若手教員の年次研修も、教科専門指導員の支援も得て実施している。	◎
	授業等におけるICT機器の活用及び実践	全生徒 全教員	年間を通じて	<ul style="list-style-type: none"> ・全教員がICT支援員の支援を受けながら技能の向上を図る ・取組の目的は、①生徒の授業への意欲向上②教員のICT活・実践力の向上 	生徒の授業評価 教員の学校評価	調査結果で肯定的な回答 80%以上	○生徒・教員とも、アンケートは実施しなかった。	特に活用が苦手な教員に、得意な教員がペアを組んで、扱い方を伝えていく。	△

重点的な取組事項－2		生徒の豊かな心を育む			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心の指標となる自己肯定感・自己有用感の向上。 ・生徒の学校生活満足度の向上。 ・生徒会中心の生徒が生徒に行う授業の年2回実施。 ・情報モラル及び心の教育の質的向上。 ・本物に出会う体験を重視し意図的に実施する。 ・周年行事に向けて、調べ学習に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学校評価、教職員自己評価の肯定的な評価を85%以上にする。 	<p>○個々のアンケートは実施していない。生徒の学校生活満足度は各学年とも平均80%以上であり、生徒は現状に満足していると言える。</p>	<p>次年度も以降も引き続き、生徒の自己有用感や達成感が向上するような取り組みを学校を挙げて取り組んでいく。</p> <p>今後も、「だれもが生き生きと輝ける加賀中」をスローガンとして種々Sの教育活動に取り組む。</p>	○	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ運動の一層の推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のあいさつ運動取組満足度、教員の肯定的評価を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶の中には、しっかりした返事も含まれることを共通認識として全教員が指導する。 ・生徒会・委員会活動の活用・推進。 ・連携小学校との協働。 ・地域・保護者との協働。 	<p>○生徒会による毎週水曜の挨拶運動には、生徒会役員以外の生徒も参加している。</p> <p>○開かれた学校づくり協議会による挨拶運動にも、関係の皆様に取り組んでいただいた。</p>	<p>今後も、生徒会や開かれた学校づくり協議会と協力共同して取り組む。</p>	○
<ul style="list-style-type: none"> ・各種ボランティア活動への自主的・積極的な参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の各種ボランティア参加率を60%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広報・事前周知活動の工夫。 ・参加しやすい体制の確立。 ・地域・保護者との協働。 ・吹奏楽部やボランティア部を中心に、地域貢献活動を学校として支援する。 	<p>○落ち葉掃きボランティアには、参加生徒（延べ人数）は全校生徒の33%に達した。</p> <p>○花いっぱい運動への参加生徒は全校生徒の11.2%に達した。</p> <p>○夏休み前に、ボランティア活動に関する講習会を実施した。</p>	<p>今後も、ボランティア活動を学校経営の1つの柱に据えてボランティア活動を推奨していく。</p>	○

<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会主導の生徒が生徒に行う授業の年2回実施。 ・心の教育の内容充実。 ・情報モラル教育の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の学校評価で90%以上が肯定的と回答。 ・生徒の情報機器の適切な使用（SNSトラブルなし）率80%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会特別授業の取組を活用したいじめSTOP活動等の心の教育の推進・充実。 ・家庭への加賀中の情報モラル教育等の浸透・周知（生徒会活用含む）。 	<p>○教員アンケートでは、「よくできた」が、38.5%、「おおかたできた」が46.2%と、85%近い評価がある一方、「できていない」と15%強の教員が評価している。</p>	<p>これまで、本校の特色の一つに掲げて取り組んできたが、目的や内容等について再考することも必要である。</p>	◎
<ul style="list-style-type: none"> ・本物に出会う体験を数多く設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒と教員の事後アンケートの肯定的評価をどちらも85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統文化、キャリア教育、宿泊行事、アスリート招聘、TGG見学等、感動的な体験を企画し実行する。 	<p>○個々のアンケートは実施していないが、実施後の生徒の振り返りシートや感想文には、どれも好意的かつ感動したなどの声が多い。</p>	<p>事前の仕込みや外部機関との折衝など、決して容易ではないが、本校の経営上の重点項目として継続して取り組む。</p>	◎
<ul style="list-style-type: none"> ・周年行事に向けて、自主的に学習するなど、生徒の参加の機会を保障する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事後のアンケートに、教員・生徒共に80%が肯定的評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会だけでなく、一般生徒にも呼びかけ、主体的に周年行事に参加させる。 ・周年行事の企画にも生徒意見を取り入れる。 	<p>○アンケート結果では、「ほとんどの生徒が、10年に一度の周年行事を経験できてよかった」「来賓の話を聴いて加賀中のことを考えた」「一所懸命校歌や区歌を歌い、号令に合わせた」等の肯定的・主体的な回答であった。また、生徒の発表を評価する声も強かった。</p>	<p>生徒は、それぞれ母校としての加賀中やこの地域について考える良い機会となったようである。</p>	◎

重点的な取組事項－3		保小中連携の推進と進化発展				
A	今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
	<ul style="list-style-type: none"> ・連携推進を通じた児童・生徒の変容と落ち着いた学校づくり。 ・学習指導要領の改訂に伴う、義務教育9年間を見通した連携の深化、及び保育園との連携。 ・特に、授業規律を研究する分科会を設け、小中での落ち着いた授業の構築について研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学校評価、教職員自己評価の肯定的な評価を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒アンケートは実施しなかった。 ○教員の学校評価では、特に研究授業の内容や実施回数等について、検討が必要との意見が出された。 	<p>本校は、保育園を含めた15年間を通じた連携教育を伝統として取り組んできた。しかし、研究（研修）のための研究（研修）になっている側面も感じられる。原点に立ち返り、再度、連携の目的から検討して、全教員が共通実践事項に沿って取り組む必要がある。</p>	△	
B 目標実現に向けた取組み						
	項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・教員同士及び保育士と教員の連携の推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・「教員同士の連携」に対する教職員の肯定的な評価を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・合同研修会（年6回以上）を中心とした連携活動を通して、保・小・中の関連ある項目や発達段階を踏まえた教科指導や児童・生徒指導の取組を行う。 ・キャリア教育の観点に立ち生き方指導も心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○7/28に、キャリア教育をテーマに、関本恵一東京音楽大学特任教授をお招きし、講演会を実施した。 ○教員の学校評価では、特に研究授業の内容や実施回数等について、検討が必要との意見が出された。 	<p>今後も、担当者任せにしないで、本校の連携事業の目的を再考してより充実した連携を模索していく。</p>	○

<p>・教員・保育士と児童・生徒、生徒と児童との連携の実施</p>	<p>・小学校学習指導要領を全員が精読し、小学校での教科指導計画等を知る。 ・「教員・保育士と児童・生徒、生徒と児童の連携」に対教職員の肯定的な評価90%以上にする。</p>	<p>・授業支援等：3回以上 ・授業体験：1回以上 ・補充授業協力：夏休み他 ・部活動体験：1回以上 ・学校説明会：1回以上 ・他に、随時、小学校での授業観察や出前授業等の実施</p>	<p>○研究授業は、計画どおり実施した。 ○全員ではないが、本校の教員が皿沼小学校での授業の様子を参観した。 ○実技教科（体育・技術・音楽）の教員が皿沼小学校で出前授業を行った。</p>	<p>研究授業回数の見直しや、研修に対する考え方は要検討課題。 研究授業とは別に、ラフに、相互に授業を参観する期間を設定するなどして、学校や児童生徒のリアルな姿を見る必要がある。</p>	○
<p>・学習指導要領の改訂に伴う、義務教育9年間を見通した教科連携の深化、及び保育園との連携</p>	<p>・「連携の深化」に対する教職員の肯定的な評価を90%以上にする。</p>	<p>・皿沼小学校と実施している「小中連携」を学習指導要領の改訂を踏まえ義務教育9年間を見通したものとし、必要に応じ域内保育園とも連携する。</p>	○上記と同じ	上記と同じ	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

【成果】

- 本年も、落ち着いた雰囲気のある学校を維持することができ、生徒はそれぞれの目標に向かって活動した。また、顕著ないじめの報告はなく、多くの生徒の学校生活は安定している。
- 授業や課題などでAIドリルを活用する場面が多く見られ、生徒にとって、タブレットが必須の学習道具になりつつある。
- 教員集団も、日常的な授業改善に前向きに取り組み、「わかる授業、楽しい授業」の創造に自主的に取り組んだ。
- 本校の特色の一つである保小中連携事業は、今年度はコロナ禍の制限を受けずに、各校園の教職員の積極的な実践が展開され、目的を一定程度、達成することができた。
- 朝の読書の時間を有効に活用して本に親しむ活動を年間を通じて実践できた。また、国語科をはじめ他の教科でも図書室を利用することも増え、さらにビブリオバトルが文化祭の一つプログラムとして定着したことも大きな成果である。これを、図書館司書や図書担当教員や図書委員会の活動が支えた。
- 生徒に対して、日常的にボランティア精神の涵養を促している。夏休み前には、ボランティアについて全校で学ぶ機会をもった。そのような中、ボランティア部の年間を通じての加賀保育園での活動や、皿沼小学校算数教室への参加、開かれた学校づくり協議会主催の行事にも参加生徒が増加している。

【課題および解決の方向性】

- 年次研修や必須事項の研修会は実施できたが、特別支援教育や授業力向上のための校内研修会を実施できなかった。来年度は、研修委員会を特別委員会として立ち上げ、組織的・主体的な研修活動を実施する必要がある。
- 本年度より、家庭学習の方法を、これまでの自主学習ノート（Gノート）から、AIドリルへと変更した。このことにより、家庭学習の内容が大きく変更されたが、学力向上にどの程度結びついたかは、今後の検証課題である。また、生徒の生活アンケートによると、家庭学習の時間よりも、ゲームやPC等の端末機上の動画視聴の時間のほうが圧倒的に長い。家庭学習の習慣化はもとより、家庭学習の質を高める指導が求められる。
- 依然として、不登校・不登校傾向の生徒が一定数在籍しており、今後も、担任や学年教員だけでなく、SC、SSW等の専門職にも関わってもらいながら、学校として組織的に支援することが求められている。また、より温かい雰囲気学の学級・学年・学校づくりも求められている。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

- 開かれた学校づくり協議会の皆様のご協力により、挨拶運動や花いっぱい運動、地域合同清掃や茶道体験などを通じて、生徒に貴重な経験の場を与えてくださったことに感謝申し上げます。これらの経験を通じて、確実に「豊かな心を育む」結果となったと確信しています。
- 今年度5月より、新型コロナウイルス感染症が5類になったことを受け、それ以降の諸行事は、基本的には制限を行わない形で開催しました。その中で、運動会や文化祭に多くの保護者の方に来校いただき、生徒の活躍する姿をリアルタイムで会場で見えていただきました。これが普通と言えればそれまでですが、改めて、当たり前の大切さのありがたさや重要性を痛感した一年間でした。
- 11月18日には、本校開校40周年記念式典および祝賀会を盛大に開催することができました。特に祝賀会は、20年ぶりの開催となり、多くのOBOGや地域の方々に参加いただき、笑顔あふれる雰囲気の会でした。開催まで誠心誠意ご尽力いただいた実行委員会の皆様、物心両面で温かいご支援をいただいた協賛会の皆様、そして当日の様々なところで活動していただいたPTAの皆様、関わっていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

(3) その他（学校教育活動全般について）

- 大きな事故怪我なく、一年生（魚沼自然教室）と三年生の宿泊行事（北陸方面への修学旅行）をほぼ予定どおりに実施することができた。
- 都立高校の入学選抜試験において、推薦試験では、受検者の63%が合格した（例年は30%台）。
- 新標準服を一年生から導入し、男女統一のデザインや、女性用スラックスやキュロットスカートの採用、夏用のポロシャツ導入等、生徒からは好評を得ている。また、今年度より、これまでの校則を見直し、「生活の決まり」として、更衣期間の廃止や、登校時の靴の色制限や靴下の色制限を廃止するなど、生徒が考える要素を増やした。